手紙の作法を知る

作者が、雪が降り積もった朝に用件を記した手紙を出したところ、雪に触れないような風呂を解さない人の言うことは避けないが、雪にお笑いの役目を果たします。

手紙には作法があります。

頭語: 拝啓など
時儀の挨拶: ここ雪のこともなどに触れる
挨拶の挨拶: いかがお過ごしですかなど
本文: さてなど本文に入る
結びの挨拶: 相手の健康への気遣いなど
敬語: 敬具など
後付: お日付、自分の署名、相手の名前

この形式が正式な手紙の作法になります。

国語総合
第29回
高校講座 ログ学習メモ

助動詞の接続を理解する

助動詞・動詞、形容詞、形容動詞や体言などに付いて、意味や話し手の判断を添える活用のある付属語。

それぞれの助動詞は用言に付く場合、と他の活用形に付くかが決まっています。

打消の助動詞「やす」は未然形に接続する。

推量の助動詞「む」は未然形に接続する。

完形の助動詞「る」は連用形に接続する。

定形の助動詞「な」は体げにも接続する。

動作を正しく理解することは主文を正しく読めることにつながります。

注意する語句

主文に「助動詞」と「連体形」、「係り結び」（強調の働き）。

主文に「助動詞」と「係り結び」（疑問・反語）。

国語総合

第29回
纷纷雪、ややもしくは降り、て白い朝、人のだんだりに見ることありて、文を
やると、雪のことを言ひきし、返りに、「この雪かが見ると、
き入るべきかは、かへすがへす口惜し御心なり。と言ひたどりしこそ、
をかしらにか。今は亡き人ならば、かばかりのことも忘れ難し。

【現代読訳】
雪が順次に降っている朝に、ある人のこと（言い散らすべきではないこと
があり、手紙を送るよう思って、雪のことを何とも書かかかげなや
り返しに、「今後の雪を見つどに感じると、ひと言もおっしゃらない
程の、雪がおっしゃるかと、聞き入れることができましょうか（いや、でき
ましょう。重ね重ね残念な。ああ、様）おこですよ。」と言ってきたのは、おも
しろいことであった。今は亡くなってしまった人であるので、この程度のちっ
としたことも忘れ難い。